

懐かしき愚者たち

やさか こう
八坂 宏

はやらない病院の花

乾燥肌に悩まされていた時、南村クリニックでもらった塗り薬は不思議なほど効いた。文也はその薬を信奉するようになった。痒いところならどこでも塗った。だが医師の南村は胡散くさくて信用できなかった。初めていった日、若い頃はT大の研究室で勉強したと何気なく宣伝した。文也は生返事をしながら聞いていた。話の腰を折るために、

「こちらは、内科も診ていただけなんですよね」

尋ねた。医師は頷いて立ち上がった。貼り紙に記された十以上の大手の病院を指さして、何やら説明した。大柄なわりには小声で話すので聞き取れなかった。多分、それらの病院と提携しているという意味だろう。ある日、下半身に痒みがあるのでそこにつけてもいいかと聞いた。

「いいですよ。どんな具合かね」

「ペニスの先っぽです」

「付き合っている女性はいいるの」

「別れました」

「その後、他の女性とも交際したのかね」

そばに立っていた看護師が文也の顔を見て、軽く首を振った。余計な質問には答えなくてもいいわよ、という合図である。文也もおかしいと思った。医師とはいえ越権行為である。女と付き合ったからといって、何らかの症状が出たわけではない。彼は念のために聞いただけだった。

そのクリニックは四階建ての建物の二階にあり、いついっても空いていた。薬のためと、家から遠くないので利用していた。別の日、塗り薬をもらいにいったら、飲み薬まで出そうとした。

「いえ、それは結構です」

文也は断った。南村医師はきつと睨みつけ、声を震わせた。

「きみは、医師の指示が聞けないのか」

「そういうわけではなく、いらなただけです」

「私は所見によって、出しているんだ」

「患者の自由じゃないですか」

「好きなようにしてくれ」

「そうします」

文也が解せない顔つきをして診察室を出た。受付で塗り薬だけ受け取って廊下に出たら看護師が後から来た。た。

「いつも、ああなの。だから患者さんは来なくなってしまうの。気分を壊さないで」

慰めてくれた。今まで看護師を一度たりとも意識したことはない。ただ、色白のどことなく日本人離れた中年女と違ってただけだ。それからというもの、思いやりのある親切な女だと思ふようになった。

勤め先の出版社に南村章夫が入りするようになった。クリニクの医師と同じ姓である。南村という姓は多くはない。小説家の南村章夫とは縁があった。中学の頃、彼の書いた作品を読んで感銘を受け、愛読者に近い気持ちをもっている。

『野球少年、上京す』の主人公は野球に情熱を傾け、将来はプロ野球の選手になるのが夢だった。高校三年の春、地方予選の決勝に進出し、甲子園も目前に迫っ

た。試合は一对ゼロで九回の裏まで来た。ノーアウトでランナーを二塁に出して一打同点のピンチになった。ピッチャーは冷静に投げて三振と凡打で打ち取った。後一人という時、ショートを守っていた主人公はガチガチになり、そのまま何事もなければいいと、祈る気持ちでいた。その矢先、打者の打った球がダイレクトに転がってきた。ところがそれを弾いてしまったのだ。走者が三塁に止まらずにホームへ走るのが見えた。慌ててキャッチャーに投げると悪送球になった。打者も俊足をとばして一周しホームにすべり込み、二人がホームインして逆転負けという最悪の結果になった。

この屈辱的な失策は尾を引いた。地元の人、とりわけ熱狂的なファンは主人公を激しく非難した。家の壁にこう落書きがしてあった。——お前は郷里の飛躍を打ち砕いた疫病神である——これで野球選手の夢を絶たれた。レギュラーからも落とされた。高校を卒業すると、逃げるようにして上京した。田舎を発つ日、駅に見送りに来た母が、

「皆の言っていることなど気にしないで、頑張りなさい」と激励する。

「心配しなくてもいい、向こうでも野球をやるよ」

母を安堵させた。だが主人公は痛手を受けていて、

ローカル線に揺られながら、こんな田舎、二度と帰るものか。田舎つぺどもよ死ね、死ね、と呪うように呟く。東京では専門学校に入り、徐々に自分を取り戻していく。基礎体力づくりにはげみ、しばらくしてプロ野球のテスト生募集に応募する……。文也は、家や共同体を嫌悪して都会を漂流する主人公にいたく共感した。

それから十一年後、作者の南村章夫に出会うとは考えてもみなかった。非常に意外だった。機会があったら、かつて読んだ著書の話をしたいと思った。だが偏屈なところがあって、会釈してもそっぽを向いた。自尊心が並外れて強く、意にそぐわない編集者など一切無視した。文也は南村の素振りを見て嫌われていることが分かった。それは会社での彼の存在感のなさにも繋がっていた。文也は組織の中で生きるのが苦手だった。小説家は懇意にしている編集長以外は相手にせず、二人はよく雑談した。

「昨日の夕方、家に帰る時だったね、バス停のベンチに、背中を向けて初老が座っていてね、缶ビールで餃子を食べているんだ。ああいう光景にひかれるなあ。熱いのをむしゃくしゃ食べてさ、何か伝わってくるんだ」

「ほう」

「気づかれないように、いつまでも見ていたな」

「そうですか」

あれこれ話しているうちに、思いがけない会話が耳に飛び込んできた。

「弟が台東区でクリニックをやっているね」

と南村が言うのである。文也の行く病院かもしれない。あり得ない話ではなかった。作家と医師は兄弟というわけだ。二人は外観は似ていないが、変人っぽいところが共通している。彼は自分のことを棚に上げてこう言った。

「弟は世間から浮きそうな性格をしていてね、危なかしくて見てられないな」

編集長がどういう風にと尋ねると、独善的で普通の感覚に乏しいから、経営的にも厳しい。皮膚科と内科をやっているが、世の中の不景気と相まって患者も少ない——文也は笑いそうになりながら、二人が兄弟だと確認した。血は争えない、似た者同士だ。

その日は土曜日で休みだが、用事があったて出社した。会社は九段下のビルの中にある。十分ほどで用を果たしてから社を出た。途中、三省堂に入り、文芸書のコ

「ナーで南村章夫の近著を拾い読みした。全体的に面白くないので、買うのをよして別の本にした。

電車で住まいのある本所吾妻橋まできた。このところ、冬の冷たい風が吹くばかりで、雨がほとんど降らない。クリニックの前を通りながら、塗り薬の切れているのを思い出した。あれから八ヶ月が過ぎている。あの時のちよつとしたトラブルは忘れているだろう。患者は一人しかいなくて、すぐに彼の番になった。いつもの薬をいただきたいと言うと、医師は頷いた。それから文也の手に行っている本屋のビニール袋を見て、「本はよくお読みになるの」と聞いた。ええ、と返事したら更に続けた。

「南村章夫という小説家を知っているかね」

「知っています」

「そうかね。あれは私の兄貴なんだ。よかったら読みなさい」

「さつき、本屋で拾い読みしたけど、自分にピッタリこなかったです」

「拾い読みだけじゃ分からないぜ」

「直感的に分かります。興味ないです」

「聞いた風なことを言うな」

医師はとたんに不機嫌になった。文也は目の前の男

がエキセントリックな性格をしていることを思い出し、いくらか悔やんだ。だが物事は勝手に動いてしまった。兄貴を侮辱するのかと感情的になり、文也も言い返した。

「あんた、何様のつもりだね」

すると医師は立ち上がり、受付兼調合室に退いて、大きな図体で物陰から様子を伺っている。診察が終わった後、よくこういう仕種をする。文也は黙っていられなくなった。

「そんな所にいないで、ここに座ってください」

「座れだど。医師に向かって失礼だろう」

「冷静に話がしたいんです」

分かったと言いながら再び戻ってきた。回転椅子に座り、机の引き出しからスマホを取り出して、警察に連絡すると言い出した。文也は却って筋の通った論が展開できるので、どうぞ、かけてくださいと勧めた。すぐに看護師が近寄ってきて来て取り上げた。

「先生、そんなことは駄目です」

「この男が、私を脅かそうとしているんだ」

「勘違いですよ」

医師はここには、二度とくるなど手で追い払う仕種をした。文也は仕方なく立ち上がり、診察室を出た。

薬のたぐいは何ももらわず、診察券だけ受け取って待合室にきた。看護師が出てきて、彼の二の腕をつかんでしきりになだめた。

「気にしないでね。あなたが間違っているわけじゃないわ」

「この病院はもう来ないよ」

「ごめんなさいね、お詫びするわ」

その間ずっと、彼の腕を握りしめていた。いたわりの感じが伝わってきた。彼は階段を降りながら、敷居者のくそつたれめと口に出して言った。アパートに帰ると、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して飲んで、少し落ちついた時、本を忘れたことに気がついた。時刻は午後一時を過ぎていたので、すでに閉まっている。開いていても取りに行くのははばかられた。あのモッサリしたうすのろの医者顔は見たくなかった。来週にでも行って受付で話せばいい。

しばらくしてドアをノックする音がした。開けると看護師が立っていた。ベージュのダウンコートを着、口紅は目立つピンク色を塗っていた。病院で見るイメージと違ってエロチックに見えた。彼女は本を届けてくれたのだった。お札を言うと、この近くだから平気よと微笑んだ。それから小さな紙袋を差し出した。受

け取って中を見ると、ボックスケーキだった。

「よかつたら、これで一緒にお茶を飲もうよ」

「まあ、お茶をご馳走してくれるの」

「うん、本を届けてくれたから」

看護師はそれなら上がらせてもらおうと、タタキでパンプスを脱いで中に入った。折り畳式の小さなテーブルを出してから湯を沸かし、日本茶をいれた。彼女は工藤夏実と名乗った。

「おたくの先生には、びつくりしたね」

「奥さんに逃げられるのも無理ないわ」

妻子とは離婚したようである。夏実もうんざりしていて、しょっちゅう辞めることを考えている。先生への好意もなくなつた。話の成り行きから愛人関係ということが分かった。彼女は隠し立てをしなかった。文也もただの上司との関係ではないと読んでいた。クリニックに勤めて五年目だという。話が一段落すると、夏実は立ち上がって、本棚の一角のフォトスタンドを手にとつて見た。文也と肉親が写っているスナップである。

「あなたの郷里はどこなの」

「北海道」

「じゃあ、親御さんはそっちにいるのね」

「いや、神奈川県に住んでいるよ」

文也はそのわけを話した。父が町の有力者の息子を車で轢いて死亡させた。それ以来、住民の視線が冷ややかになり、世間ともうまくいかなかった。文也は田舎の芋連中とは決別せよとそそのかした。三年前から両親と妹は伊勢原市で暮らすようになった。

「私だって、事情があるのよ」

「どんな……」

文也は立ち上がってそばに近寄った。

「父が在日なの」夏実はさらっと告白した。

「韓国、いいじゃん」

「やっぱり差別されるわ」

前からそうかもと思った。どこというわけではないが、顔のパーツが違うのだ。無論違和感はない。変人の医師とは、もちつもたれつの、お互い様という関係だろう。だからといって、あんな性的魅力のない男と付き合うことはないだろう。二人は心を開いて各々の事情を打ち明けたせいとか、ぐっと親しみを感じた。他人という気もしなかった。夏実が文也の手を握ったのは自然だった。そして唇を合わせ、長い間舌を這わせた。布団を敷いた。乳房は扁平だったが、尻も太股も陰毛もふくよかだった。ペニスはずつぽりとはまり、

心地よかった。

「相性が合うわね」彼女も感心した。

「初めての女は早く行きがちだから、体を動かさないで」

「そうするわ。先に行ってもいいのよ」

「一緒がいいよ」

十歳以上離れた二人は一時間ほどセックスに陶醉し、一杯射精した。終わってからまた色々喋った。聞かれるままに郷里の話をした。人口四千人の田舎町で、子供の頃から好きではなかった。東京は世間がないから気楽だと話した。

「私はそうでもないわ」

隠していても、民族の違いを見抜かれるのだという。一時間ほどしてから夏実はいとまを告げた。

帰る前に彼女は決心するように言った。

「私、センセと別れるわ。医者のかせにあんなに偉くない男みたことないもん。セックスだけが強い。パール・バックの夫みたいにいね」

夏実が帰ってから布団を畳み、机に座った。また訪ねてくるだろう。恋をしてセックスをして、いつか飽きてしまうのか。それはそれでいい。どうあれ、医師の愛人と寝たので、溜飲を下げた。

落魄の友

十九年前の夏のある日、田端で飲んだビールは苦いだけだった。その日、アパートの部屋に男二人と女四人がいた。坂下康夫は困惑していた。なぜ女が四人もいるのか、多すぎてバランスが取れないのではないか

最初、同僚の富山明人が彼のアパートに会社のマドンナと彼女の友達を招くことになった。友達というのは、美人ではないけれど、そこそこの顔立ちをしていて、頭の上さを売り物にしていた。坂下は遊ぶのに「手頃だな」と期待していた。四人でピスタチオのショートケーキを食べながら雑談した。その頃は、何といつても某宗教団体のテロ事件が話題になった。今までこんな面白い事件はなく、坂下は多大な関心を寄せていた。前代未聞で問題を一杯孕はらんでいると一人で喋った。

彼らはアルマゲドンすなわち世界最終戦争を起こそうとしたけれど、失敗した。マドンナが意味不明とい

う顔つきをした。ふだんから寡黙な富山は黙って聞いていた。どことなく上の空で何かに耐えているような趣があった。テーブルの花瓶には、赤いグロリオサが飾つてある。優雅だが大げさで空々しく見える。富山にはおよそ不似合いな花だ。十分ほど過ぎた頃、バタバタと足音がして、二階の部屋に厚化粧の女二人が現れた。坂下は予想外の出来事に啞然とした。突然の訪問者達も驚いたことだろう。だが仕事柄、場慣れしていてお綺麗な女性ねとか、素敵なお嬢さんフレンドね、とお世辞を口にした。

こちらの女性たちは……と富山が後から来た二人を紹介した。池袋のバーのホステスである。そして富山が言う古典的な美女をさして、

「この方は、映画女優みたいでしょう」

と付け加えた。女達は笑みを浮かべながら白けた。

不器量なもう一人のホステスは、その差別まがいの発言にガラガラした声で笑つてこう言った。

「富山さんは、前から彼女をゼツサンしているのよ」

「あなた方は、お二人を目当てにお店に通っているわけ」

マドンナの顔は皮肉を帯びている。

「坂下さんは、年上が好きみたいだから、こちらが好

みかな」

マドンナの友達が中年の不美人に手を向けた。言いようのない憤怒を覚えていた坂下は表情が歪みそうになった。けれども、ここでは無理してでも笑うしかなかった。

私たちは邪魔ではないかしらんと、マドンナと友達がわざとらしく顔を見合わせた。その間、富山は冷蔵庫から五百ミリと三百五十ミリの缶ビール六個と、刺身の盛り合わせをテーブルに並べた。やがて乾杯して飲み始めた。女達を捌くのは坂下の役割だが、どんな言葉を発しているのか分からなかった。せっかくのビールも心地よく酔えなかった。

「富山さんは、難しい本を読んでいるのね」

不美人の女が室内に目を向けた。部屋は本棚に囲まれ、窮屈この上ない。しかもベッドがデンと置かれている。六人はノアの方舟にいるような気分です座っていた。富山が文学をやっているのです、本が沢山あるのだとマドンナが笑みを浮かべた。会社では理解不能の詩を書いているので社員達から一目置かれているとも。

富山はマドンナを好いていた。またホステスの古典的な美女にも強く引かれていた。二十八の彼は、その美女と結婚したいと考えている。彼女は年上で子持ちで、

しかも建築関係の男と付き合っている。富山の美意識からしたら美貌かもしれないが、坂下はそんな目で見ていない。むしろ生活にくたびれて、やつれており、華が感じられない。もつとも、そんなことはどうでもよかった。彼はマドンナの友達を裸にして、ベッドでたわむれる妄想ばかりした。だが、風向きはそちらのほうには向かなかった。

マドンナが最近のエピソードを披露した。最近、どこかの猫が毎日のように訪ねてきて、一定の時間、過ぎるしていく。それがいつの間にか、定住するようになり、夜になると彼女のベッドに潜りこんで来るといのである。ふと坂下は、自分をネコになぞらえて考え、マドンナも悪くないと恋心に似た気持ちを感じた。

酒食しながら一時間ほど過ごして散会した。六人は嘔み合わず、ちぐはぐだった。二組の女たちが前後して帰ってから一悶着が起こった。

「どうして、ホステスまで招いたのかね」

坂下は詰問した。

「俺は美貌の彼女を見せたかったんだ。感心したんじゃないかな」

「誰が感心するもんか」

「俺の値打ちも、少しは上がったよ」

「あんたは、雰囲気を壊しただけだ」

セックスが富山に負けずに好きな坂下はひたすら「手頃な女」を何とかしたかった。しかし演出のミスである。初歩的なドラマツルギーすら心得ていない。バカなことをしたものだ。坂下は富山をはげしく憎んだ。色黒で小太り、どっちかという醜男の富山がますます醜く見えた。こうなったのも彼の愚かな自己顕示欲のなせるものだ。

その時、救急車がサイレンを鳴らして通り過ぎた。富山は立ち上がり、窓を開けた。

「また、どこかで事故でもあったんじゃないかな」

と独り言を呟いている。先日も自動車事故で八十八の婆さんが轢かれたが、命には別状はなかったという話をした。富山は救急車が走り去った後も窓から離れなかった。時間を稼いでいるのだろう。坂下は馬鹿馬鹿しくなって、帰る用意をした。

坂下と富山は秋葉原のデザイン会社に勤めていた。

ここではカタログや小冊子、チラシなどを製作している。坂下は編集や文案を考えたりするのが仕事で、富山は総務課である。

いつ頃だったか社員の欠員が生じ、募集することに

なった。その時、富山が知っている人がいるから紹介したいと申し出た。係長の浦辺が会ってもいいと返事をした。だが坂下は難色を示した。話を聞くと、その男は富山と仲のいい鹿島達夫の共通の友人だったからだ。坂下は鹿島とそりが合わず、双方で認め合っていない。鹿島は前は自主映画の助監督をやっていたとかで、入りたての頃は、自慢するようにやたら「助監」を口にした。ジョカン、ジョカンと言うと、女官にか聞こえなかった。陰気臭い顔つきをしていて、落ちこぼれそのものだった。注目を引こうとして駄洒落を吐き、回りの者から「師匠」と呼ばれていた。

坂下は彼らの友人の入社には反対した。だが浦辺係長は一度会ってからにしようと言う。何日かして、社の近くの喫茶店で面接した。応募者の鈴木は鹿島に付き添われて待っていた。中肉中背の細面で、二十三には見えず、老成していた。平凡なありふれたタイプだが、それでいて一家言もっているふうで、それが鼻についた。

「鹿島さんとシナリオ教室で一緒だったそうだね」

浦辺が履歴書を手にながら聞いた。

「そうです」

「今も書いているの」

「ええ、習作ですがね」

「坂下くんもライター志望なんだよね」

坂下は彼らと同類扱いにされたくないので曖昧に返事をした。それに、鹿島などにもものを書く才能はないと見下していた。

「鈴村さんは、どんな本をお読みになるの」

『『愛と死をみつめて』を愛読しています』

「かなり前の本だね」

坂下は場違いな感じがした。

「こいつ、けっこう読書家なんです」

鹿島が口添えした。どことなく古風な価値観の持主に見え、しかも勝ち誇つたようなシタリ顔をしている。こんな手合いはかなわないと思った。色々と話し合つて社に戻った。鹿島は途中まで鈴村を送つていく。

浦辺は鈴村なら悪くないと思つたようだ。考え方は今風ではないけれど進行係だから差し支えないし、仕事はできると見ている。その言い方は既に採用するかのようだった。坂下はただ一点、鹿島の仲間というのが気にいらなかった。嫌な奴と机を並べている上に更に一人増えた。力関係にも影響を及ぼすかもしれない。二対一、いや富山を含めると三対一になり、それを老獪な浦辺が自由に操作しそうだ。へたすると孤立しか

ねない。

「私は反対です」

坂下は食い下がった。けれども鈴村は採用された。やはり彼ら三人はトリオを結成した。鹿島は勢いづいたのか、いつそう虚勢を張るようになった。同僚達はいかかわらず「師匠、師匠」と呼んで媚びている。富山は詩集を出して権威を高めた。彼らのうち鹿島が突出していた。それでいて自分独自の考えはなく、言っていることが支離滅裂だった。富山はあれでいいじゃないと鷹揚である。というよりも何も考えずに肯定している。道徳的な鈴村がある経験談を語った。繁華街のスナックで飲んでいたら、隣に座っていた女客が酔つてシナダレかかってきた。すると彼は「女らしく振る舞え」と注意してやったというのだ。

「男なら、対応すべきだ」誰かが言つた。

「ナンパしろというの」

「そうだよ」

「私はみつともないことはしないよ。そんな遊びは認めない。男は矜持を貫くべきです」

その時、坂下は口をはさんだ。

「矜持も糞もあるか。相手の女がもし、やりたいというなら、知らない間柄でも応ずるべきだ」

「あなたは軽薄だ。私は聞く耳を持っていません」

「今は価値観が変わってきたんだ。ナンパという振舞いを格上げしてもいいんじゃないか。男女が出会う場所がないから仕方がないだろう」

「私はその手法を認めません」

彼は従来のモラルを主張した。利口ぶり、上品ぶりながら、その存在から下品さが漂っているのは否めなかった。そんな男が黙って座っているだけでも苛立ち、むかついた。

秋の慰安旅行の前日、仕事のピッチをあげていた。

夕方近く、始めて見る女性の訪問客があった。彼女は端っこに座っている鈴村に一礼して話しかけた。

「恐れ入りますが、浦辺係長はいらつしやいますか」

浦辺は人に会いにいついて留守である。鈴村は客をまともに見ようとせず、坂下にこう伝えた。

「主任、オネエちゃんがきましたぜ」

坂下はギクリとした。気位の高そうな女性は眉間に皺を寄せた。彼は立ち上がり、「バカ、失礼だぞ」と小声だが客に聞こえるように叱った。それから訪問者に自分の名前を名乗り、名刺を差し出した。彼女はＹというコピーライターの代理人で、原稿を持参したとい

う。多分娘だろう。

「遅くなって申しわけありません」

「いいえ、とんでもありません。まだ間に合いますから、大丈夫です」

坂下のほうが恐縮して頭を下げた。一目見て父親に似ていることが分かる。背はすらりとして、グレーのスカートがよく似合っていた。原稿の受け渡しが終わると、彼女はゆっくりと鈴村に体を向けた。

「あなた、オネエちゃんはないですよ。これでもれっきとした人の妻ですわ。ひどいですよ」

Ｙの娘は歯切れのいい口調で抗議したのだった。鈴村は間の抜けた顔つきをして相手を見上げた。

「お前、謝れよ。無礼じゃないか」

坂下は腹が立った。だが彼は抵抗するかのようには黙った。他の社員達はこの上もない珍事に野次馬的な好奇心で眺めていた。

「お前の話し方はなっていないぞ」

坂本はなじった。鈴村は依然として沈黙している。

「主任さん、もういいですよ。どうもお邪魔しました」

Ｙの娘はすぐに気持ちを切り替えた。坂下は来客をドアまで送っていった。鈴村は馬のように顔をふって、人差指で鼻の下をこすった。これは具合の悪い時にす

る醜い癖だ。兄貴格の鹿島が喫茶店で頭を冷やしてこいと鉄槌を下した。鈴村は皆の視線を浴びながらしきりに首を振り、鼻を鳴らし、部屋を出ていく。なんとも見苦しい光景である。先輩の鹿島がもつと教育をしてやるべきだと坂下は言い出した。だが彼はいまのは魔がさしただけでふだんの鈴村は、真面目で倫理観はもっていると擁護した。鈴村の根底にあるのは、一時代前の男尊女卑である。聞くところによると、二十年離れた伯父の影響を受けて育ったという。これではいまの時代には通用しない。坂下はそんなタイムラグの社員の採用に強く反対せず、曖昧に認めてしまったことを悔やんだ。

「お前もなっていないぞ」と坂下は鹿島に言った。

「八つ当たりしないですよ」

「今日は黙っていられない」

坂下はかねがね思っていることを指摘した。鹿島は落ちこぼれの目立ちたがり屋で見るに忍びない。しかも人と話す時、常に自分が優位に立ちたいがため、相手の弱点やアラを指摘して卑劣な戦法でくらくらいついてくる。その他、グチャグチャ、ジクジクと理屈を並べ立てた。回りから笑いが起こり、賛同の拍手をする者や、うるさそうな顔をする者もいた。

そこへ、総務課の富山が顔を出して、

「鹿ちゃん、元氣している」

肩を揉むような仕種をした。

「ああ、俺はいつだって元氣だよ」

「そうこなくちゃ嘘だ」

事情を知らないとはいえ、富山の鈍感ぶりは罪と言っている。いつだって空気が読めないのだから。天然のお人好しなのかもしれない。

翌日は社員旅行で伊香保温泉。宴会の前に同僚の一人と風呂につかりにいくと、浦辺がいた。彼は片手で泳ぐ真似をして近づいてきた。浦辺は鈴村のことはYさんにお詫びしておいたからと報告した。そしてまだ若いから見守ってやるようにと言う。坂下はそんな気はまったくくない。若いといっても中年男のように分別臭い。鈴村を連れてきた鹿島にも問題がある。しかも上司の浦辺は無批判に容認しているのが許せない。鹿島は社長の肝いりで入社したということもあって、遠慮しているのだろう。

それとは別に浦辺は課長のポストに早くつきたがっているらしい。それには統括している製作部に問題が発生しないようにしなければならぬのだ。

「多少のことは寛大になれよ」

「あんなクズ共に我慢しろというのですか」

「クズはないよ」

「特に鹿島はクビにしたほうがいいんじゃないですか。それが武士の情けというものです。彼は枝ついたまま腐ったミカンです。社長にも責任があります」

社長は鹿島の履歴書の写真を見て、無骨な顔をしているから、仕事はよくやるだろうと判断した。けれども見事にはずれた。格好ばかりに気を使い、タレント並みの派手な服装をして、ネットレスや指輪をして出勤する。そして夜遊びに、現を抜かし、酒ばかり飲んでいる——浦辺はポツとして空想に浸っているのか、坂下の話を聞いているとは思えない。そして、

「とにかく、頼むよ」

能面のような顔に薄笑いを浮かべて立ち上がった。湯をかきわけて、岩のほうにいき、その上に登った。タオルを手でぶらさげて隠そうともしない。どうやら誇示しているらしい。一緒の同僚も気がついたのか、さっそく立派ですねと揶揄した。浦辺ははにかんだように笑った。これで三十八の分別盛りである。坂下は白けた。そこへ何人かの社員が来て、湯の中にボチャボチャと無遠慮に入った。浦辺は天を仰ぐようにしている。社員達はいつまで立ちつくしている小ダビデを

見て、口々にからかった。

「ギリシヤ彫刻みたいですね」

「誇らしげですねえ」

「一種の存在証明かな」

浦辺は何か言われたからといって、気分を害することもなかった。むしろ楽しんでる。その時、ライバルの若井という課長候補が嗶れ声でからかった。

「チビツ子にしては、でかいなあ」

ドッと笑い声が浴室内に響いた。上背のない浦辺は、体のことを言われるのを極度に嫌っていた。彼はことを大きくしたくないのでとりあわず、湯船の縁に身を寄せて黙りこくっている。

暮のある日、阿佐谷のスナックに飲みに行った。こは富山の地元である。スナックはつい最近開店した店である。若い夫婦がやっていて、初々しいけれどデイスプレーは安手だ。客は他にいない。ビールを抜いてから、富山が家で用を果たしてくるといって一旦帰った。一人で飲んでいると、二十分ほどして人が入ってきた。

「あれッ」

驚いた声を立てた。客ではなく鹿島だった。坂下は

とたんに興ざめた。なぜ鹿島が来たのか。彼はカウ
ンターの端に座ると坂下にももの言わずに、

「耐ハイ」

低い声で注文した。二人とも言葉が出てこず、無言
でグラスを傾けた。社では隣同士というのにこんな凍
てついたような光景はない。どうしてこうなったかは
ハッキリしている。富山が鹿島にここで待っているよ
うにと電話したに違いない。むろん坂下の名前を言わ
ないで。さぞかし、この思い付きに悦に入っているこ
とだろう。しかし坂下が鹿島を心から嫌っていること
に気がついていない。薄々知っていても自分のアイデ
アを優先させた。彼の魂胆は見え透いている。要する
に『面白い奴』と見られたがっているのだ。だが仕掛
けられた者はたまったものではない。

しばらくして富山が姿を見せた。彼は二人が離れて
座っているのを不思議そうに見ながらスツールに腰を
下ろした。ビールを頼んでから気がついた。

「俺、いけないことをしたのかな」

「富山くんはニブいなあ」と坂下。

「人間関係の機微が読めねんだ」鹿島も苦々しい表情。

「どうも膠着状態になっているようだね。でも、ここ
を突破するにはどうしたらいいか、考えるといい。そ

れが創造とつながるんだ。心を閉じていては、思考は
働かないからね」と富山。

「何を言っているんだ」

鹿島は言葉を叩きつけた。

「坂下さんは、どう思うかね」と富山が聞く。

「修復不能だよ、まったく。会話をすれば何とかなる
というが、鹿島くんは知的世界が崩壊しているんだ。

何を基準にして考えていいのか、よく分からない人だ
からな」

「なんてことを言うんだ」鹿島がむっとした。

「事実だろうが」

「表に出てもいいぞ」

「やるか」

坂下は手にビール瓶を握りしめて外に出ようとした。

富山は二人の間に割って入り、三人で仲良く飲もう、
と宥めた。何とか表向きは収まった。坂下は以前にホ
ステスを招いた時のことを思い出し、あの時の二の舞
じゃないかと非難した。

「あれは最悪だったな」

「しかし、俺にとつては最悪ではない、いいことがあ
った」

「なんだ、いいことって」

「いいことなんだ」

「もつたいぶらないで、言えよ」

鹿島がせかせた。

「じゃあ、言うよ」

富山はあの中の一人と結婚することになった。子持ちの『古典的な美女』と呼んでいる志保である。とにかく信じ難いが、どうやら二人は愛し合っているようである。生活能力のない富山が所帯を持って、他人の子供を育てるとは無謀である。彼はセックスがしたくて、結婚を迫ったに違いない。何しろ彼の性の飢えは並みはずれている。

「今まで隠していたのか」

鹿島が不満そうに口をはさんだ。

「時機を見て、公表するつもりでいた」

「相手は資産でも持っているのか」

「そんなものはない。俺らは深い愛で結ばれているんだ」

「俺は血のつながらないガキなんかご免だ」

「それは鹿島くんの考えだ」

富山はただならぬ雲行きの中で緩和策として話題を提供したのだろう。喧嘩沙汰はとりあえず沈静化した。富山と志保は三ヵ月後には正式に結婚にこぎつけた。

彼の結婚式に招かれたのがきっかけで、坂下はマドンナの橋田美和と結ばれた。さらに連鎖して鹿島がマドンナの友人の桑島あさみと交際しだした。あさみは手頃ではなく、主体性のあるしつかりした女だった。けれども男を見る目はなく、結婚半年で鹿島の下から去るはめになった。あさみの決断に坂下も富山も諸手をあげて賛成した。もう一人の醜いホステス徳子はトラックの運転手と結婚した。坂下一家は結婚して二年目に墨田区にある中古のマンションを買って住んでいる。一子をもうけ、家庭は可もなく不可もなしたが、これでいいと考えてはいない。

あれから十九年が過ぎ、坂下は四十九歳になった。フリーのライターでどうにか食べており、美和はスパーのレジ係として家計を支えている。息子が一人いる。だが彼は生活ができてマンネリに陥っていた。夕食の時、美和に話したら、

「業界人じゃない人と話すといいわ」

「それもあるな」

「富山さんは、どうしているかしら」

「分からないね。もう長い間、御無沙汰しているからな」

「会って話したら、どうなの」

「そうだね」

富山は時代を超越しているから、何かヒントになるものがあるかもしれない。特に彼のゆるいところがいい。彼は仕事をしながら詩作活動をしているのだろうか。足もとを見られそう電話もしづらい。けれど思いきってかけた。遅い時間である。細君の志保が出た。礼儀をわきまえた好意的な口ぶりだった。すぐに富山と変わり、近況を話したら懐かしがってくれた。

富山は業界新聞社に勤め、志保は専業主婦で、息子は大学の二部に通っている。彼と親しかった鹿島の話も出て、桑島あさみと別れて以来、ずっと一人で暮らしている。鹿島のような男が孤立して過ごすのは危険かもしれない。小さな会社に勤めているが、常に忿懣を抱えている。

富山によると、鹿島はヘイトスピーチに加わっているという。つい先日、新大久保のデモに参加して、通行人に暴力をふるわれた。彼が血を流し、負傷したという話になると、二人とも生き生きしてきた。富山も本当は鹿島を疎んじ、軽蔑しきっているのだ。二人はヘイトスピーチの話で盛り上がった。日本は中国に追い抜かれ、韓国は高姿勢で向き合っているというのに

成す術もない。アジアの一等国を誇っていた国が、いつかはその他大勢の国の一つに転落しそうである。日本人はそれを素直に受入れられないでいる。過激な連中は韓国を罵らずにはいられない。多くの国民はデモに参加しないけれど、彼らと同じ体質を抱え込んでいる。

「どうしていつまでも鹿島と付き合っているのかね」

坂下は念のために聞いた。

「悲惨な奴を見ているだけで、楽しいよ」

「そういうことか」

「奴は落ちるところでまで落ちたよ」

「そうか。ところで、詩は書いているの」

「いや書いていない」

「何故だね」

「いまは沈滞している。いつかはもっといい詩を書いて、認められたいけどね」

「それはお互いさまだ」坂下もいい仕事をして評価されたいと思っている。「どうだい、たまに会って、飲まないか」

「うん、そうだね。でも……」

富山はいくらか言い淀んだものの、オーケーしてくれた。十九年ぶりの再会ということになる。富山の提

案した国立市の飲み屋に決めた。約束の日は三月十六日である。それから四日した頃、富山から電話がかかってきた。

「あのお、変なことを聞くけど、坂下さんは人を募集してる広告会社を知らないかね」

「急に言われてもなあ」

「なければないでいいけど」

「心がけておくとよ」

坂下は当てのないままに答えた。富山は出先だからだと言つてすぐに切つた。電話のあと、切羽つまつている感じが心に残つた。

その日、国立駅を降りた。富士見通りを十数分直進して、付属の音楽高校の前に飲み屋はあつた。店の前に立っているユニフォームが目印である。開店の六時頃に店に入り、カウンターに座つて日本酒を注文した。店内の壁には、至るところに写真が張りつけてある。それらはみな釜ヶ崎を写したもので、個展を開いている最中のようなのである。

「どうぞ、ご覧になつてください」

マスターに勧められて一巡した。ふと彼はこの写真のような非日常が自分にもあるような気がした。決して他人事ではなく、身近な風景かもしれない。見終わ

つてからゴーヤチャンプルをつつきながら飲んだ。富山はなかなか姿を見せない。三十分してから彼の自宅に電話した。コールサインを長々と鳴らし続けたが出なかつた。間をおいて二度かけたが、梨のつぶてである。急に仕事が入つたのか、それとも具合が悪いのか。結局、一時間ほどいて店を出た。その後、彼から何の連絡もなかつた。黙つてすつぽかしたな、と胸のうちでは咎めた。特に失望したわけでもない。二度とコンタクトをとる気はない。一年後、富山が電話をかけてよこした。

「あの時は申しわけなかつた。金がなかつたんだ」

謝罪した。が、声は明るくはずんでいた。細君の志保は新宿の熟年専門のキャバクラで働くようになった。是非、飲みについてほしいと頼まれた。

「ああ、いいよ。昔を思い出すな」

坂下は心持ち陽気な声を立てた。一度くらいは顔を出してみようと思つた。富山は清掃の仕事をして生活費を稼いでいるようだ。そして依然として鹿島と付き合っている。所詮その程度の男だ。

いつまで隣人か

その男とは二度も隣同士になった。最初は一九七〇年代、石神井公園の南田中町である。松木昌彦は武蔵野らしい雰囲気を残すその街が肌に合って、すっかりなじんだ。駅前商店街にある安いバーに通い、また本屋をよく冷やかした。その主人が話しかけてきた。

「以前はよく檀一雄さんが、どてらを着て歩いていました。いまは見かけませんねえ」

「ぼくも見たことないですよ」

「海外に住んでいるのかもしれませんがね」

作家の家は個性的なしゃれた造りだった。いつ通っても檀一雄（1912～76）の姿はなかったが夫人は路上で何度も見かけた。

松木の住んでいたアパートは夢丸荘といい、木造の二階建てである。真ん中が通路になっており、部屋は相当数あった。彼の部屋は二階の六畳一間。大家は別棟に住み、管理人もいない。監視されたり干渉されたりすることもなかった。集団の中ではみ出しがちな性

格をしている松木は目立たないように物静かに生きていくというのが真情だった。ここはその点ではふさわしい。右隣に若い男女が引越してきたのはいつ頃だったか。隣同士といっても接点がないので、ほとんど顔を合わせたことがない。大方、同棲中の男女だろう。共用の郵便受けには山田と記されていた。

ある夜更け、夢現ゆめうつに小犬の鳴き声が聞こえてきた。弱々しい哀れな声である。晩秋で冷え込みも厳しくなった。あまりうるさいので目が覚めてしまった。そして思わず壁に耳を当てた。それはセックスの最中の嬌声であった。窓の下で寒さと飢えで犬が鳴いているという夢になったわけだ。以来、隣のエロスに夢中になった。二十七の彼は無関心ではいられなかった。嫋嫋とした声に興奮し、大団円に向かうと、部屋の整理箆しほがコトコト揺れた。盗み聞きするのは卑しいが、恥より欲望が優先し、彼はその度に好色になった。妻は丸顔の十九か二十歳、夫は三十前後である。男は人好きのしない嫌味な顔つきをしている。休みの日、アパートの庭でバドミントンをしているのを見たことがある。キヤアキヤアはしゃいで楽しそうだが、空虚な幼稚な青春という感じがした。

夫婦はよく口喧嘩をした。男が身勝手な論理で攻め

て泣かせ、後から機嫌をとって、元の鞆に納める。これがいつものパターンだ。他人の家のイジメとはいへ、聞くに堪えなかった。男は隣近所に迷惑をかけ、よくトラブルを起こした。松木もレコードの馬鹿でかい音響に文句を言いに行った。ドアをノックすると女が出てきた。

「音楽の音が大き過ぎますよ」

「彼に話しておきます」

「日曜日の朝っぱらからひどいなあ。旦那は？」

「トイレにいらっています」

「待っていますよ」

「ウンチだから遅くなります。すみません」

トイレは共同である。おそらく部屋の中にいるに違いない。間もなく音はやんだ。あんな男にしては可愛い子だと感心した。可愛いだけで社会性はまるでないが。

松木の勤めている会社は大手の電気会社である。新宿にあり、彼は倉庫の管理を受け持っていた。毎日、西武池袋線と山の手線を乗り継いで通った。電車の中ではたいてい週刊誌を読んだ。その日、電車が富士見台駅を出てすぐに窓越しに富士山の稜線が見えた。週刊誌から目を離し、全体的な形を見ようとして体をこ

ごめた。瞬間、大きく揺れてよろめいた。

「ちゃんと立っていると言うんだよ、な」

という声があった。連れの女がクスクス笑った。そのカップルがアパートの隣人であることは既に知っている。男は彼を非難したのか、妻をからかったのか、判断しかねた。もし松木としたらこんな不愉快なことはない。せつかくの富士山も台無しである。あの頃は東京から富士山がよく見えた。

気を取り直してまた誌面の活字を追った。車内はだんだんとすし詰めになってきた。読むわけにはいかず、丸めてコートポケットにつっこんだ。電車は終点に近づき、やがて池袋駅のホームにすべりこんだ。停車する寸前、靴の上にバサツと音がした。足もとに週刊誌を落とした。「あつ、いけない」彼は聞こえよがしに言っただけで、満員の中ではかなり強引な仕種である。拾ったと同時に扉が開き、外に押し出された。

ゆっくり歩きながら、何気なしに手にしているのを見て、アツと思った。それは彼のものではなく、『ぴあ』という映画雑誌だった。コートに手をやると一冊すっぽり収まっている。まるで手品師にやられたみたいだ。何故そうなったかは明白である。誰かが落としたので拾ったのだ。顔が赤らむ思いがした。持主は彼の咄嗟

の行為を浅ましいと思つたに違いない。人通りの少ない所に立ち止まって、どうすべき迷つていると、声をかけられた。

「その雑誌は、俺のだけだ」

名乗る人を見て二度びっくりした。その乗客は隣室の山田だった。

「自分が落としたものとばかり思つて」と松木は言訳した。

「捨おうとしたら、そつちのほうが早くて」

「それは申しわけない」

「すごい早技だったよ」

蔑んだような薄笑いを浮かべた。その表情が忘れられない。まったく嫌味つたらしい。

隣人はアパートの周辺で顔を合わせても松木には無関心だった。あの時の乗客と同じ人物だとは気がついていない。たとえ知つていたとしても、彼にはどうでもいいことなのかもしれない。

いつの間にか、性の声もマンネリ化して、日常のありふれた物音の一つでしかなくなつた。夫婦は半年くらいでいなくなつた。松木は夢丸荘で四年間過ごした。

練馬区の団地は七階建ての建物が四棟あり、松木一

家は一号棟の五階だった。静かな町で植栽も豊富に見られ、庭にはシデやケヤキやカヤなどが茂つていた。隣近所の人は申し分ないほどこい人達だった。

三十三歳の松木と四つ下の妻、一人娘の三人暮らしである。松木はここでも誰かと付き合うようなことはなかつた。もつとも、隣近所の男同士で交流している住民はあまりいない。

当時はマンションブームのはしり、次々と建設された。右隣は数年間に二組が代わり、三度目は三人家族が引越してきた。細君と子供は見かけるが、亭主とは顔を合わせたことがない。彼ほど人付き合いの嫌いな人間はいなかつた。何よりも濃い関係になることを恐れ、だから新しい隣人が気になつた。

「お隣は、どんな人たちなの」

妻ののぶ子に聞いた。

「普通の人たちよ」

「嫌な奴でなければいいがね」

「そんな人達じゃないわ」

松木は独身の頃は隣近所など意識しなかつたが、一家の主になるとそうはいかない。大方のことはのぶ子が前面に出て処理した。しかしやがて悩ましいことに気がついた。右隣の亭主が子供と遊んでいるのを見て、

どこかで見たことがあるような気がした。薄っすらと記憶に残っている。

「あいつかも……」

間違いない。石神井公園の男である。中肉中背、丸顔で額が広く、嫌味な顔つきをしている。何よりも山田姓である。恋人とバドミントンをやっている凡庸な若者の姿が浮かんだ。細君はその頃の女と違っている。のぶ子にイヤそうにこぼしたら、

「知らん顔していればいいのよ」

「奴の存在そのものが、ムカつくんだ」

「抑えなさい」

「これから、何があるか分からないぜ」

「何も無いわよ」

のぶ子は平然としている。何もなくとも隣同士というだけで居心地が悪かった。そう思うと山田の女房敏子までがカンに触り出した。彼女は何か楽しいのか年中笑っている。その声は松木の神経にさわり、耳にする度にいびつに聞こえた。日によって気にする時もしない時もあった。ある一時期、妄執のように聞こえてきた。どうしてこんなに神経質になるのか、自分でも分からなかった。のぶ子は夫のことをノイローゼではないかと言う。彼は情緒不安定で必要以上に攻撃的に

なった。その日も夕食を食べていると、

「アハハ……」

と高笑い聞こえてきた。それは廊下を鉄の玉が執拗に転がっていく音に似ていた。

「ああ、またか。おい、窓を閉めてくれ」

「閉めたら暑いじゃん」娘のゆかりが口を尖らせる。

「気にしなければいいのよ」

のぶ子は仕方なさそうに立ち上がり、サッシの窓をそつと動かしした。右隣の山田家とは台所がコンクリート一枚で隣り合わせになっている。両家とも窓を開け放っておくと物音がもろに響いてくる。

「みんな、鈍感だなあ。あの胸糞悪い笑い声を聞いて、

気分悪くならないのか」

「別に鈍感じゃないけど、いちいち気にしても始まらないわ」

「ゆかりはどう思う」

松木は六歳の娘に聞いた。

「私もオバサンの笑い方、嫌いな」

「そうだろう、ゆかりだったら、何か感じているはずだと思っていたよ」松木は共感者を得て勢い付いた。

「あの笑い方はごまかしなんだ。如何にも一家団欒を楽しんでいますが、という様子だけど、あれは無意識の

演技だよ。人間の作りがマヤカシなんだ。玄関先で手ごわそうな知り合いと話している時なんか、アハハハの連続だからな」

「でも、私はお父さんほどじゃないわ」

「山田さんの奥さんは、自律神経失調みたいよ。しようがないわよ」

「弱いくせに笑い声は攻撃的なんだ」

「得てしてそんなものよ」

松木は大抵の音には無頓着で、上の階から伝わってくるピアノの音も気にならない。どういうわけか、隣の笑い声には違和感を覚えた。そのためか、好ましくない感情が増幅した。亭主は言うまでもなく、息子も気に入らなかった。息子の純一はゆかりと同年で、同じ幼稚園に通っている。こましゃくれていてどことなく女の子っぽい。いっだったかゆかりがいじめられて帰ってきた。純一は気になったのか、後から来て玄関のドアから顔を覗かせた。

「ゆかりちゃん、泣かないで。いい物を買ってあげるから、こっちにおいで」

大人の便法を駆使して機嫌をとっている。幼稚園児の小賢しいおためごかし。松木はとたんにカツとなった。

「いい物を買ってあげるんだって。生意気言うな。帰れ」

純一は松木の顔を見ると隣のドアに駆け込んだ。

台所仕事をしていたのぶ子が慌てて部屋に飛んできた。

「何てことを言うのよ。大人が向きになることはないわ」

「俺は子供でも許せん」

「お隣と関係が悪くなったら、どうするの」

「それは困るよ」

「私だって、悩むわ」

さすがに松木は気が咎めた。それからというものの隣りの細君は挨拶しなくなった。純一も歩廊ですれ違ふと顔を伏せ、肩を衣紋掛けのようにこわばらせて歩いた。体中で松木を拒んでいる。

小学校にあがると、いくぶん和らいだのか、回覧板を届けに来るようになった。だが松木はどうにも気にならない。些細なことでも悪口を言わずにいられたかった。学校の夏休みの日、玄関先で純一の声があった。

「これ」

妻に何か渡している。

「あら、ありがとう。どこへいつてきたの」

「タンザワ」

「丹沢にいつてきたの。楽しかったでしょう。よかったですわね」

妻が空虚なお世辞を言っている。純一が帰ると松木は台所に顔を出した。土産の饅頭をもってきたようだ。

「純一に持つてこさせるなんて、エチケツトを欠いているな」

「誰でもいいわよ」

「あの女は、俺を避けているからな」

「それはないわ。あなたがこだわっているだけよ」

確かにこだわり過ぎかもしれない。それに残暑と仕事の疲れで怒りっぽくなっている。やっぱりノイローゼ気味なのか。次の日も様子がおかしかった。帰宅してからデッキチェアに体を横たえ、イライラしていた。その時、不意に隣から笑い声が聞こえた。例の鉄の玉が転がるような非人間的な響き。松木はベッドに潜り込んで両耳をふさいだ。けれども笑い声は魔物のようになまつわりついてくる。彼は我慢できずに台所にいつて、

「なんだ、あの笑い方は！」

のぶ子にぶつめた。

「他人の笑い声なんて、どうにもならないわ」

「俺はバカにされているような気がするな。あの女に」

彼は衝動的に食卓の饅頭の箱を床に叩きつけた。次に足を乗せ、体重をかけて押しつぶした。その上、ペしゃんこの箱を手で力一杯ひねった。のぶ子は夫のすることを黙って見ていた。いつもと違って一言も言葉を発しない。そして夫に協力するように饅頭の箱から中身を取り出して、シンクの籠に捨てた。松木はそんな妻が気味悪くなった。彼は冷静になつてから尋ねた。

「きみも啞然としただろう」

「別に。それで気がすめばいいわ」

「もしかしたら、俺のしたことを肯定しているんじゃないのか」

のぶ子は松木と違って、平衡感覚に富み、少々のことでは揺らぐことはない。その妻が松木の行為を容認しているとなると、却つて不安である。

「のぶ子も山田さんが嫌いだろう」

「好意を持っているとは言えないわ」

「そうだとしたら、俺には辛いな。妻が夫の同類だとしたら共倒れだからな」

「何を心配しているの。クヨクヨしないで忘れなさいよ。スカツとするのよ」

「だけど、悔しいよ。俺、三個も食べたからな」

「よく考えてから、食べればよかったのよ」

一遍に三つも食べるなんてどうかしている。館あんの嫌いなゆかりは始めから見向きもしない。妻も口にしなかった。

猛暑の夏が終わり、秋口になると、松木は落ち着いてきた。隣の笑い声が少なくなつた。自律神経失調が改善されたのかもしれない。隣人が不幸よりも幸福のほうがいいに決まつている。幸せな女のほうが周りを明るくするからだ。彼は昔から育ちが悪かったり、貧乏に翻弄された人間を恐れた。山田の細君がいい方向に向かうのは大歓迎である。

しばらくして隣家に異変が起こつたのを知つた。山田夫婦が離婚したというのである。あまりにも唐突な報せだつた。夫婦は子供が焼き餅を焼くほど仲がいい。近所でも「笑いの絶えない明るい家庭」というのが定評になつている。それがどうしたことだろう。理由は亭主の女関係のようである。男だけが団地を出て行った。

「俺はあの笑い方に問題があると思うな。あれじゃ、男は愛想をつかさよ。男から見たらセクシーじゃないんだな。妻以外の女をつくつても仕方がないだろう」
「笑い方なんか、関係ないわ」

「あるよ。嘘っぱちが崩壊して、実体が現れたんだ。でもあの旦那がいなくなつてよかった」

こういうことは妻にショッキングなことらしい。のぶ子は一カ月前に知つたのだが話す気にはなれず、衝撃が引いてから伝えた。松木にしたら憑き物が落ちたように身が軽くなつた。

細君の笑い声など何ほどのものではなく一向に頓着しなくなつた。隣人の離婚が松木家に平和をもたらしした。松木はいっそう妻を愛し、子供を慈しんだ。

「ぼくはのぶ子ひとりで十分だよ」
彼はにこやかに言う。

「当たり前よ」

月日は流れ、年齢も重ねた。あいかわらず世の中を空気のような存在になつて過ごしている。ゆかりは短大を卒業すると社会人となり、結婚した。松木は時折ストレスに負けながらも何とか人生を切り抜けてきた。彼の息抜きは飲むことだった。松木とはいえ、人並みに女に関心があり、浮気ぐらいはした。いつも完全犯罪だが、疑われそうになつたことがある。地元のスナックで飲んでいて頃、ちよつとした誤解を与えた。ホステスと腕を組んで歩いているところを、山田敏子に見られ、それが妻の耳に入った。のぶ子は夫の出入り

しているスナックを知っていて、夫を十分に信頼している。松木は何事もないと断固とした口調で抗弁した。
(あの女、余計なことを言いやがる)

松木は憎んだ。それからはトラブルを恐れて新宿に拠点を移した。といって隣人と内的な葛藤があるわけでもなかった。それはそれですんだことだ。

六十一歳で定年退職し、第二の人生を子会社に迎えられる。妻はカルチャー教室に通って源氏物語だの万葉集などを勉強している。六十代の半ばになった。ある日、のぶ子が隣家の情報をもたらした。

「このところ、お隣に年配の男性が来ているみたい」「俺も見ることがある」

「弟さんかもしれないわね」
山田敏子には独身の弟がいると聞いている。何日かしたらのぶ子が近所の主婦から、敏子と男が手をつないで歩いていたという話を聞いた。弟ではなさそうである。彼女は毎日働きに出ているから恋人ができてもおかしくはない。

だが、弟でも恋人でもなかった。のぶ子が近所で行き合った時に敏子に打ち明けられた。亭主が博多から戻ってきたというのである。夫は再婚した女性と別れて、晩年を元妻と過ごそうというわけである。松木は

神経を尖らせた。自分たちの平和が乱されるかもしれないのだ。均衡が崩れなければならない。彼はとかく大げさに考えるたちだった。あれから三十年間経っている。一目見た限り、山田は当時の面影が薄れて年老いた。人間的に丸みを帯びてきたと言えなくもない。だが実際はどうなのかはわからない。

そのうち、のぶ子が近所で山田と行き合った。「奥さん、お世話になります。旦那によるしく」

挨拶をした。旦那によるしく、という言い方が尊大に聞こえた。目線が高く一段と見下している。あんな奴に舐められてたまるか、松木は闘争心をかきたてられた。夫婦は共働きで朝早く別々の時間帯に出かけていく。亭主は時々、遅い時間に歩廊の手すりですタバコを吸うことがあり、煙の臭いが漂ってくる。まあ、いいだろうと松木は気にしなかった。これといったこともない日々が続いた。

一年後、隣家に不幸が生じた。細君が急性心不全で亡くなった。葬儀は密葬ですまし、どこにも知らせなかった。山田はその頃から出勤しなくなり、何かの趣味に耽るといふこともなかった。掃除、洗濯、料理はきちんとこなしているようだった。時にはコンビニで弁当を買ってくる姿を見かけた。彼は衰えたのか、歩

くのが辛そうである。今後とも深入りしないほうがいいぞとのぶ子に言いふくめておいた。

いつの間にか、山田が杖を突くようになった。松木よりいくつか上だから七十にはなっている。一人暮らしの身では大変だろうと同情をした。が、それ以上のものではない。松木は一日に一万歩は歩くことにしている、健康には自信があった。山田みたいに惨めにはなりたくない。その日も界隈の川沿いの遊歩道を歩いて帰宅した。

「お隣さんから、買物を頼まれちゃった」

のぶ子がきまり悪そうな顔をした。松木は眉間に皺を寄せて機嫌を悪くした。

「そんなこと、断ればいいんだ」

「足が悪い上に風邪を引いているのよ」

「向こうの事情など、知ったことか」

「今回だけよ」

「次から断れよ」

「いちいち指図さしずしないでよ」

「この際、自分たちを守ることが大事だ」

「でも、あんた、うるさいわよ」

隣近所とは挨拶だけで十分である。それ以上はかわりたくない。ましてや山田などとは没交渉でいたか

った。しかし山田は強引なところがあつた。松木はそういう性格に過敏に反応した。個人の領域に侵入されること自体、プライドを損なわれたと思ってしまう。それは絶対に許せないことだった。家族がいなくてもくら体が不自由でも、放っておくしかない。

「でも、少しは頼まれても仕方ないわ」

「少しでも駄目だ。ヘルパーさんにやってもらえばいい」

ヘルパーは週一度来るのだが、それだけでは用は足せない。息子夫婦は母を捨てた父親を認めていないという。しかも入院しなければならぬ容体だとも聞いている。足は内蔵疾患からきていて、いつそう悪化している。季節は二月で寒さのピークである。山田は松木の留守に妻に頼みに来るらしい。妻は断り切れなくて、用事を果たしてやっている。桜は葉桜になり、いい陽気が続いていると思つたら寒暖の激しい日々になった。ドアホンの音で玄関に出ると、松葉杖を手にした山田が立っていた。

「奥さんはご在宅かね」

「いないよ」

「ちょっとお伺いしたいけど、おたく、つたやに出入りしている？」

「ああ、時々いくよ」

「それなら、お願いがあるんだ。『タイタニック』を借りてきてほしいんだけど」

山田は松木のカードで借りてもらってDVDを観ようというのである。たいした根性である。むろん即座に断った。彼は恐らく韓国で発生した海難事故に触発されたに違いない。客船が沈没して三百人近い客が船内に閉じ込められている。

「頼みますよ。足が不自由なだから」

「あんたねえ、今の時代、自助努力で生きていくしかないよ。こんなこと他人様にやってもらうことかね」

すると彼はそれは承知している。自分も余生がたくさん残っているわけではないから、今のうちに、あの時の感動をもう一度味わってみたい、デカプリオの相手役の女が大好きだと述べた。松木は聞いていて呆れた。それで突き放すように言った。

「私の知ったことじゃない」

「そう言わないでよ」

「どうあろうとも、自立して生きていくしかないね」

「限界がある」

「ヘルパーさんは、どうなの」

店に登録していないという。とにかく映画を観て、

気持ちを引き立てたいから、と頭を下げた。松木は焦れてきて、

「断る。帰ってよ！」

強い口調で拒んだ。山田はしぶしぶ引き返した。彼がいなくなると、隣人がどういう状況だろうと、そこまで親切にする必要はない、自分の振舞いは正しいと確信した。二時間ほどしてのぶ子が外出から戻ってきた。途中で山田と行き合って声をかけられた。あまりにも気の毒だから『タイタニック』と『アルマゲドン』の二本を借りてきてあげた。

「なんだ、その『アルマゲドン』というのは」

「自爆する映画だって」

「何だか知らないけど、凶々しい奴だな」

そう言いながら、松木は山田のような無粋な人間がこの種の映画を観ることに意外性を感じた。そして『ぴあ』という雑誌を思い出した。彼は若いころから映画が好きだったのだろう。

その十日後、五階でボヤがあった。松木は妻と娘の家に出かけていた。娘たちは上北沢に住んでいる。松木は孫と遊んでいるうちに孫が柱にぶつかって鼻血を出し、泣かせてしまった。高齢出産の子で、まだ一歳にも充たない。彼は赤子が苦手だが妻に急かされて抱

いた。それがとんでもないことになった。妻もゆかりも不器用な松木を笑いながら責めた。帰りながら車の中で、松木はそれが不満だった。

「俺は二度と孫なんか、抱かないからな」

「気をつければ大丈夫よ」

「無理やり抱かせるからいけないよ」

「だって、あなた、お祖父ちゃんよ。当然でしょう」

「お祖父ちゃんって言うな。俺はその呼称が大嫌いだ。俺はお祖父ちゃんじゃないからな。二度と言うなよ」

「じゃあ、何と呼べばいいのよ」

「仇名とか、名前がいいだろう。ゆかりにそうしつけるように話してくれよ」

「ゆかりたちは、抵抗するわよ」

「でも言うんだ。俺は年寄り扱いされたくないから」

「私はどうなの」

「おばあちゃんではければ、それでいいさ」

松木は勝手なことをほざいた。その間に家の近くで騒ぎになっていたのだ。山田宅の一軒おいた家から出火し、しかも山田が救出したというから驚いた。煙の出ている家の中に入り、

「わたしが、お父さんを連れ出すから、あなたは子供さんを避難させてください」

と八十歳の老人を助け出した。消防車と救急車が駆けつけ、火事は消し止められた。一部燃えたものの死者は出ずにすんだ。実際は、老人は誰の手も借りずに逃げ出せた。むしろ山田がモタモタして転び、腰をしたたかに打って病院に搬送された。松木はふと自爆のつもりなのかと思った。彼の《善行》は自治会から表彰されて、団地新聞にも載った。

〈体は不自由ですが、不思議なくらいに力が出ました。私も晩年に花を添えることができて光栄です〉

というコメントを見てゲツとなった。これで元気づいたらかなわない。だが、そうはならなかった。他にも病気を抱えていて、簡単には治りそうもない。一週間ほど入院生活が続いていると思ったら、山田の死去の報せを聞いた。煙を吸ったかして肺炎であつさりあの世に逝ってくれた。苦しまなくてよかったのではないか。それにしても長い縁だったな。松木は、
「永遠ととわの眠りを！」とつぶやいた。

(やさか・こう)